

<2020年度 第2回定例研究会／オンライン開催>

災害ボランティアと学生の力

講 演：高 木 亨（熊本学園大学社会福祉学部 准教授）

日 時：2020年12月17日（木）18時～19時30分

講演者の高木亨先生は、熊本学園大学ボランティアセンターの副センター長の立場にある。熊本地震以来、被災地で活躍する学生ボランティアについて、その役割と活動内容の紹介、事例として熊本地震被災地支援活動をおこなっている「おひさまカフェ」と、2020年7月豪雨災害での災害ボランティア派遣での学生の活動について紹介された。さらに with コロナ時代における災害ボランティア活動についても触れられた。その概要を、以下に報告します。

まず「頻発する自然災害」について、気候変動に伴い多発している豪雨災害や記憶に新しい阪神・淡路大震災、熊本地震等における死者・行方不明者数について説明がなされた。それらの「主な災害とボランティア活動」として、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災がボランティア元年と位置づけられ、ボランティア延べ参加者数は約137.7万人に達し、それ以降の災害と比べても突出している。これを機に、1995年に災害対策基本法が改正され、行政が「ボランティア活動による防災活動の環境整備」に努める旨が明記され、さらに2013年にも同法の改正により、「行政がボランティアとの連携に努める」旨が明記された。このように、自然災害の多発と共にボランティア活動が拡大、活性化している現状を述べられた。

次に、「ボランティア活動における留意点」について説明がなされた。

通常、被災から復興までのプロセスを時間軸で捉えがちだが、時間の経過とともに被災者の生活、特に住まいの状況は変化していくため、時間軸に合わせ空間軸で捉えることの重要性を説明された。その上で、被災地の生活再建に向けた「各段階に応じた支援・研究の必要性」を強調された。また、復興の各ステージで生活がどう変化するのか、だからどのような支援が求められるのかという、状況に応じた継続的な支援が必要であると語られた。さらに、「災害被害の本質」として、発災による直接的、間接的な被害を機に、発災以前から抱える地域の課題が噴出すると述べられ、復興に向けた支援においては被害地域を理解するという広い視点、視座が求められている。続けて、「被災者の再建力をもとにした復興支援のあり方」と題して、被災者の自力再建力（復元力）が大きい場合は支援は小さく、逆に自力再建力が小さい場合は支援を大きくするというように、被災者の再建力をもとにした支援の必要性を述べられた。

表 被災から復興までのプロセス

Stage	被災地での事象	人間生活への影響	支援
01	災害発生・応急対応	被災・緊急避難 コミュニティの崩壊	人命救助、避難所の開設、緊急支援物資の提供、人道支援
02	激しい災害の終わり 応急的な復旧	仮の生活 仮のコミュニティ形成	避難所を出たあとのケア、仮設住宅でのコミュニティづくり
03	永続的な復興計画の作成	日常生活を取り戻す準備 コミュニティの再構築	仮設住宅入居者の自治サポート、生活再建サポート
04	永続的な復興計画の実行	日常生活を取り戻す過程 コミュニティの強化	仮設に残る人々へのサポート、復興公営住宅でのコミュニティづくり
05	一つの災害としての経験の終了・継承へ	日常生活の再開・災害により顕在化した社会問題への取り組み	仮設住宅からの退去者へのサポート、記憶の継承に向けたサポート

瀬戸・高木(2014)より改変

状況に応じた継続的な支援が必要

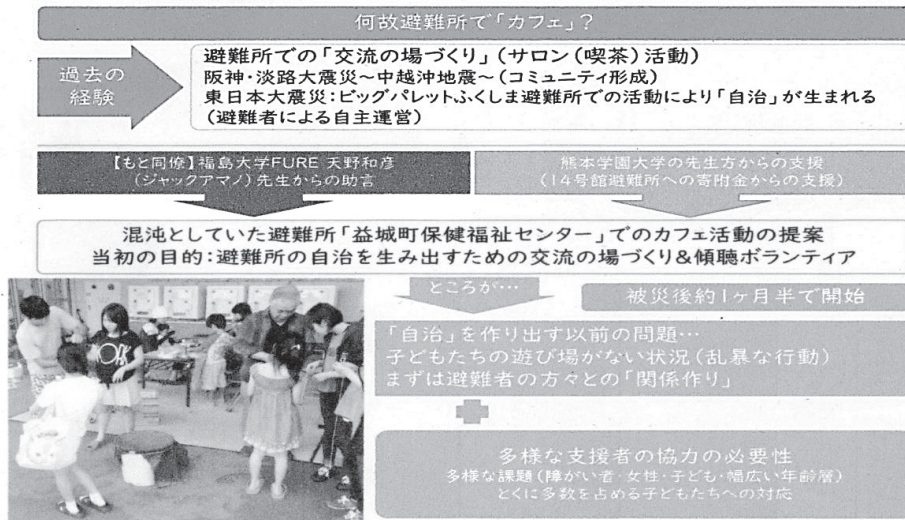
ここからは、「2016(平成28)年熊本地震の経験」として、自身の被災状況も含め、熊本県から大分県にかけての被災状況を整理された。その現下で、本学学生及び教員による「ボランティアカフェ」「おひさまカフェ」運営の経緯、「避難所から仮設団地集会所への活動場所の移行」、「おひさまカフェ」の成果と課題」について、その詳細を説明された。

「ボランティアカフェ「おひさまカフェ」運営の経緯」では、講演者の過去の経験から「阪神・淡路大震災～中越沖地震～」でのコミュニティの形成や、「東日本大震災における避難所での活動により自治が生まれ、避難者による自主運営」等を視野に、避難所での「自治を生み出すための交流の場づくり」としてサロン(喫茶)活動を提案されている。実際の活動は、被災後約1ヶ月半で開始に至っている。しかし実際には、自治を作り出す以前に子どもたちの遊び場がない状況で、まずは避難者の関係作りを目指し、多様な課題(障がい者・女性・子ども・幅広い年齢層)に対応するために、多様な支援者の協力の必要性に迫られた。そこで、現状での弱みを補い、強みを補強し、「おひさまカフェ」をプラットフォーム化することで、多様な支援者の参加(避難者にとってメニューの多様化、幅広い支援)、カフェ参加学生と様々な支援者との交流、支援の長期化を見据えた連携等が可能になった。

「避難所から仮設団地集会所への活動場所の移行」では、多様な支援者との交流の中で、教員の関与を徐々に少なくし、学生の主体性によるボランティア活動が継続されている。

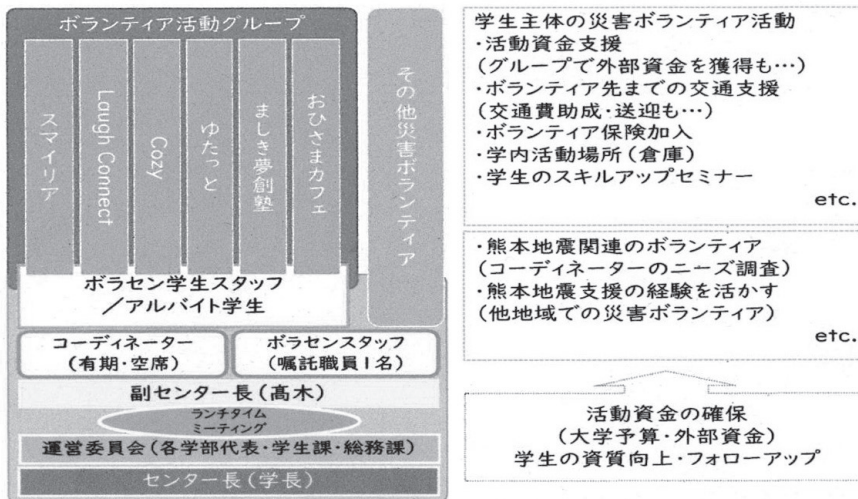
「おひさまカフェ」の成果と課題」では、成果として、仮設住宅団地居住者との関係性の構築による情報の共有、お客さまの常連化、状況に合わせた新たな取り組み(高齢者も一緒に楽しめる子ども食堂の運営、外部支援者との連携による遠足イベント)などが述べられた。一方、課題としては、避難所から仮設住宅団地へ、仮設住宅から新たな生活へと移行する世帯から取り残される独居、高齢者世帯への支援、活動継続へ向けた資金確保、後継学生の育成などが挙げられた。

ボランティアカフェ「おひさまカフェ」運営の経緯

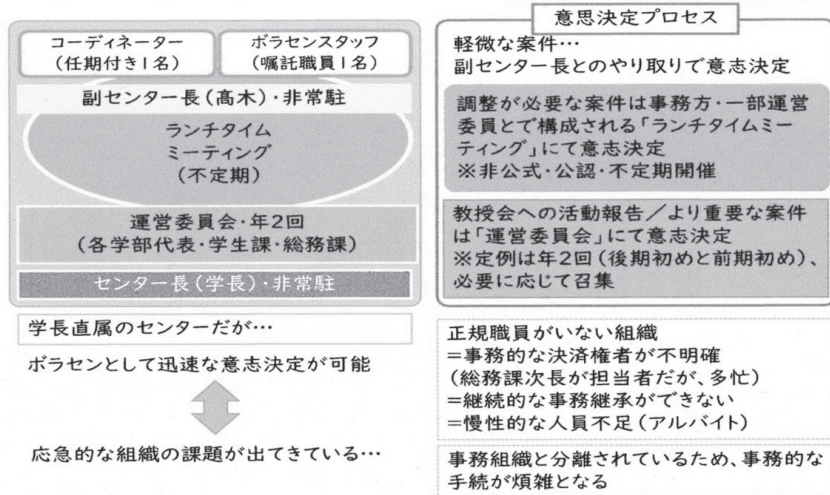


以上のような学生のボランティア活動を支援している「熊本学園大学ボランティアセンターの役割」について、「活動資金の確保(大学予算・外部資金)」、「学生の資質向上・フォローアップ」として、次の具体的な内容を示された。学生主体の災害ボランティア活動に向けて活動資金支援、ボランティア先での交通支援、ボランティア保険加入、学内活動場所、学生のスキルアップセミナーなどを挙げ、また熊本地震関連のボランティア(コーディネーターのニーズ調査)、熊本地震の経験を活かす(他地域での災害ボランティア)などの説明をされ、ボランティア活動における資金確保の難しさ、大変さを強調された。また、当ボランティアセンターの「基本的な運営と課題」として、組織としての意思決定プロセスに関する内容が示された。

熊本学園大学ボランティアセンターの役割



基本的な運営と課題



最後に、2020（令和2）年7月3日から4日にかけての熊本県の大雨（熊本県豪雨災害）における、「人的被害、住家被害の状況」、「熊本学園大学ボランティアセンターの対応」、「with コロナでの災害ボランティア活動」について述べられた。コロナ禍で発災当初は全てのボランティア活動が停止中という状態で、災害ボランティア派遣に向けた準備においてまず指針を作り、やれることは何か知恵を出すことに取り組んだ。その中で、いかに学生たちの感染リスクに対する意識を高めるかが課題となったなど、緊迫した状況について臨場感をもって語られた。

* 文中の図表は、当日の配布資料より引用。

（研究会報告者：横山孝子）